

南沢 (みなみさわ)

藻岩山の南ろくから硬石山まで、現在の川沿、北ノ沢、中ノ沢、南沢の四つの地域(藻岩・南沢地区)を総称して八垂別と呼んでいました。語源はアイヌ語の「ハツタル・ペッ」。ハツタルは「沢」、ペッは「川」であることから、「沢の川」という意味です。八垂別の中で一番南側にあることから、南沢と名付けられました。

八垂別と言われた地域のうち最も平坦な土地であり、日本で最初にラベンダー栽培が行われた地としても知られています。



▲ラベンダー発祥の地碑

簾舞 (みすまい)

語源はアイヌ語で「ニセイオマップ」(峡谷にある川)と呼ばれていましたが、後にこれがなまってミソマップとなり、簾舞の字があてられ現在の地名となりました。

明治5(1872)年に、本願寺街道沿いに設けられた簾舞通行屋の屋守黒岩清五郎が定住。現在、当時の通行屋は、札幌市指定有形文化財として大切に保存されています。



▲旧黒岩家住宅 (旧簾舞通行屋)

定山溪 (じょうざんけい)

定山溪という地名は、修験僧美泉定山にちなみ命名されました。

常山(後の定山)は文化2(1805)年、備前国(岡山県)生まれ。全国各地で修行し、嘉永6(1853)年蝦夷地に渡りました。慶応2(1866)年、張碓から2人のアイヌ人の先導により、温泉を発見し開発。

明治4(1871)年、有珠新道(本願寺道路)の検分のため副島種彦参議と東久世通禧開拓長官が岩村判官の案内で温泉に立ち寄り、常山の湯守の状況を見て大いに賞賛し、無名の溪谷に「常山溪」と命名しました。

明治8(1875)年、明治政府が太政官布告を出し、すべての国民に姓を名乗ることを義務付け、姓を美泉、名を常山から定山と改めたことから、以降定山溪と呼ばれるようになりました。



▲定山溪温泉の碑



藻岩下 (もいわした)

この地域は、昭和16(1941)年まで上山鼻と呼ばれていました。藻岩山ろくに位置し、いわゆる山の端にあるという意味から山端と例え、後にこれを山鼻とあて字したものとされています。

明治39(1906)年に藻岩村、昭和13(1938)年に円山町となりましたが、昭和16年札幌市と合併した際に、藻岩山のふもとにあったことから藻岩下と名付けられました。



藻岩 (もいわ)

アイヌの人々は、現在の円山を「モ・イワ」(小さい山)と呼んでいました。

開拓使の岩村道俊判官が、ふもとの村を円山と名付け、山の名前も円山と呼ばれるようになったため、その「モイワ」の名が当時「イン・カ・ルッ・ペ」(そこでいつも物見をするところ)と呼ばれていた今の藻岩山に転用されたと言われています。

現在は、藻岩山のふもとである昔の八垂別地域(南沢を除く)が藻岩地区と呼ばれています。



藤野 (ふじの)

昭和19(1944)年の字名改正により、藤の沢と野々沢を併せ、藤野と名付けられました。

藤の沢は、大正7(1918)年定山溪鉄道が開通し駅名をつける際、路線の敷地を寄付した加藤岩吉、小沢清之助両人の一字をあて「藤の沢」駅としたため、地名もそれまでの「丸重吾の沢」に代えて「藤の沢」とされました。

野々沢は、アイヌ語の「エプイ・ウトル・オマ・プ」(つばみのような感じの小山の間にあるもの)がなまったものといわれるほか、「段丘の広い野原が続いていたので野々沢」と言い始めたなど諸説あります。



▲丸重吾橋

230

82

230

